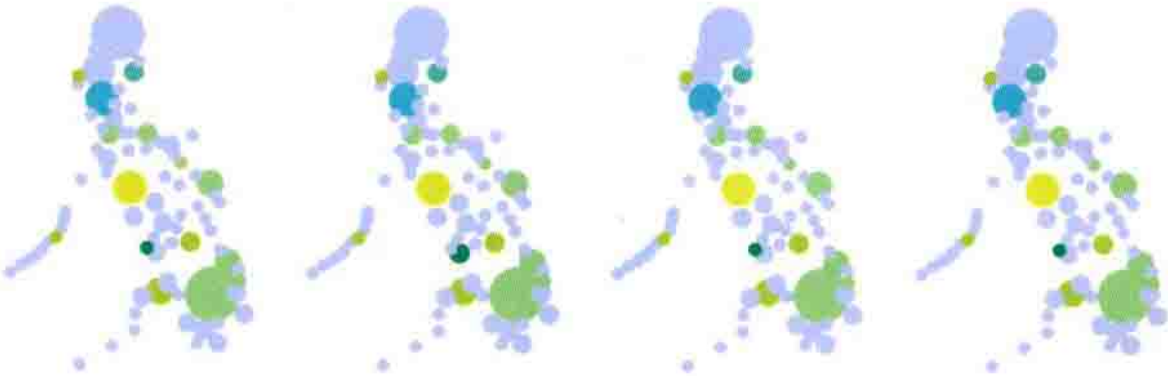
悪徳の世界史I

◆ ◆ ◆

フィリピン
華僑ビジネス不道徳講座

浅井壮一郎



朱鳥社

悪徳の世界史I

フィリピン
華僑ビジネス不道徳講座

帝州大学附属
藏書

浅井良一郎

朱鳥社

悪徳の世界史 I
フィリピン 華僑ビジネス不道徳講座

2012 年 12 月 19 日　第一刷発行

著　者　浅井 壮一郎（あさい そういちろう）
発行人　卯嶋 直子
発行元　（株）朱鳥社
〒 151-0053　東京都渋谷区代々木 1-31-7-201
電話 03-5358-3984　FAX 03-5358-3986
発売元　（株）星雲社
〒 112-0012　東京都文京区大塚 3-21-10
電話 03-3947-1021　FAX 03-3947-1617
印　刷　藤原印刷株式会社
装　丁　根本眞一
©Souichirou Asai 2012 Printed in Japan
ISBN978-4-434-17524-4　C0122

※定価はカバーに表示してあります。落丁、乱丁のお取り替えは
直接発行元までお送り下さい。送料は小社で負担いたします。
朱鳥社ホームページ　http://www.shuchousha.co.jp

はじめに　3

序　章　歴史を語るにあたって……9
老華僑の壮絶な死が教えたこと／形骸化していく日本人の敢闘精神／懺悔録と化した歴史を見直すべし

第一章　ビジネス不道徳講座……23
暗殺―老華僑の死　24
白昼の凶行を巡る不可解な背後関係／マルコス政権と結んだ強引な蓄財法／結局、事件の真相は闇のなかに
アンダーテーブル―利権と収奪　35
リベートはアジアビジネスの常識／創業以来、脱税を続けてきた会社／利益の三割に達する使途不明金／裏金は安易に払ってはならない／相続を巡る骨肉の争い／「無理のしっぺ返し」が組織を腐敗させる

自己責任とコンプライアンス 66
「この話は聞かなかったことにする」／他人に犠牲を払わせない義務／海外に土着する「日僑」創設の提言／誇りと情熱が汚職・腐敗を防止する／不法行為にどう対処するか／法律秩序の世界標準の確立

ジャスティス—矜持と自衛 94
自己責任の重みと孤独／守られた裁判の公正

KMU労働組合との戦い 105
労使交渉もアングラでの争いに／「エスタブリッシュメント流」対「華僑流」／兄弟間の仁義なきビジネス戦争

神風の碑—敢闘精神の復権 118
敢闘精神を失った戦後の日本人／特攻隊に見る自己犠牲の精神／貪欲に金と女を求めた強国スペイン／理不尽・不条理に対する反作用／戦闘意欲と敢闘精神の葛藤／歴史を動かす階層逆転のエネルギー

戦闘意欲と敢闘精神 143
「羊の子」となった戦後の日本人／最も危険な「無防備の富」／中国史を操る秘密結社・幇の存在／歴史は正反対な二つの戦意の葛藤である

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二章　フィリピン史……167
スペイン支配時代　168
キリスト教による霊的主権の回復闘争／独立の英雄ホセ・リサールの改革運動／革命軍の決起と内部対立
アメリカ支配時代　187
僅か四カ月で決着した米西戦争／比米戦争の勃発と「友愛的同化」策／「ジョーンズ法」から独立に至る道のり／砂糖産業の繁栄が社会変革の契機となる／ラモスによる右派民族主義独立運動
日本統治時代　219
オスメニア、ケソン、ロハスの政治／日本軍のマニラ占領と共和国成立／「バターン死の行進」の真実／ロハスに始まる戦後のフィリピン政治／ラウレル、アキノの登場／独立戦争と対日協力者
おわりに　257
参考文献　260
文庫化にあたり　262

悪徳の世界史I

フィリピン
華僑ビジネス不道徳講座

浅井壮一郎

朱鳥社

この作品は、二〇〇五年一月に小社より単行本として刊行されたものです。

はじめに

中国などを旅すると、日本人観光客が巧妙に仕組まれ、騙されて偽物や安物を高く買わされるのを目撃する。さらにそんな物をテレビの鑑定番組に持ち込み、赤恥をかくのもしばしばである。ヨーロッパでも有名なブランド品の店で、日本人観光客が押し寄せる直前に、商品の値札を付け替えた低グレイド品に入れ替えるのを目撃したことがある。

それは成り上った日本人の成金趣味を嫉妬と蔑視で嘲笑するもので、不愉快ではあるが、それでも良いではないかと鷹揚に思っていた。海外で生活して事情がわかった上でも、日本人観光客が現地ガイドにベラボウにぼられるのを見て、見ぬふりで見過ごす。それは争いを好まぬ、和の精神のしからしめることと思っていた。

アジアで海外ビジネスを実際に経験してみると、日本流の「こちらがまず引き下がれば、次は相手が配慮してくれるだろう」といった安易な妥協は無意味であり、むしろ有害であることを思い知らされる。「この程度の押しで譲歩するなら、次はもっと強く押せばもっと譲歩を引き出せる」と考えるのだ。特に「違法行為、不法行為も辞

せず」の相手だと日本側はお手上げである。譲歩を重ねるだけだ。これも日本人の和の精神と遵法精神のなせる業と思っていた。

だが悪徳行為は本来、見過ごすべきものではなく、戦い、制圧すべきものであるはずだ。だとすれば、日本人の譲歩は遵法を言い訳にした「逃げ」ではなかろうか。和の精神などではなく、戦意の喪失ではなかろうか。筆者は海外ビジネスを通じてそう思うようになった。

戦いは勝たねばならない。悪徳に勝つには悪徳にならねばならない。「悪辣で残虐な方が勝つ」とは戦争論の定理である。この書はそんな不道徳に身を落として、悪徳華僑と戦った日本人ビジネスマンを描いた。それ故、『ビジネス不道徳講座』なのである。

日本人は特に悪徳を嫌う。不思議なことに外国人の悪徳は大目に見るが、日本人の悪徳は許さない。憲法すら「諸国民の公正と信義に信頼」して戦争放棄した。海外で生活してみると日本人はつくづく誠実で正直な人種だと思う。その対極が中国人である。そんな日本人が「諸外国には公正と信義があり、日本人は残虐で武器を持たせたら危険だ」と教育されてきた。それこそ危険であり、何故そうなったのだろうか。

鈴木治氏は著書『白村江』で「日本の歴史は情報不足で、妙に道徳的」だと主張された。政治も外交も結局は取引の総合である。だとしたら歴史もビジネス感覚で、国

益を中心に、手前勝手に、露骨でドライに考証されてもいいのではなかろうか。そんな思いで歴史の断片を切り取ってみた。つまり不道徳な歴史である。

浅井壮一郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに　3

序　章　歴史を語るにあたって……9
老華僑の壮絶な死が教えたこと／形骸化していく日本人の敢闘精神／懺悔録と化した歴史を見直すべし

第一章　ビジネス不道徳講座……23
暗殺―老華僑の死　24
白昼の凶行を巡る不可解な背後関係／マルコス政権と結んだ強引な蓄財法／結局、事件の真相は闇のなかに
アンダーテーブル―利権と収奪　35
リベートはアジアビジネスの常識／創業以来、脱税を続けてきた会社／利益の三割に達する使途不明金／裏金は安易に払ってはならない／相続を巡る骨肉の争い／「無理のしっぺ返し」が組織を腐敗させる

自己責任とコンプライアンス 66
「この話は聞かなかったことにする」／他人に犠牲を払わせない義務／海外に土着する「日僑」創設の提言／誇りと情熱が汚職・腐敗を防止する／不法行為にどう対処するか／法律秩序の世界標準の確立
ジャスティス—矜持と自衛 94
自己責任の重みと孤独／守られた裁判の公正
KMU労働組合との戦い 105
労使交渉もアングラでの争いに／「エスタブリッシュメント流」対「華僑流」／兄弟間の仁義なきビジネス戦争
神風の碑—敢闘精神の復権 118
敢闘精神を失った戦後の日本人／特攻隊に見る自己犠牲の精神／貪欲に金と女を求めた強国スペイン／理不尽・不条理に対する反作用／戦闘意欲と敢闘精神の葛藤／歴史を動かす階層逆転のエネルギー
戦闘意欲と敢闘精神 143
「羊の子」となった戦後の日本人／最も危険な「無防備の富」／中国史を操る秘密結社・幇の存在／歴史は正反対な二つの戦意の葛藤である

第二章　フィリピン史……167
スペイン支配時代　168
キリスト教による霊的主権の回復闘争／独立の英雄ホセ・リサールの改革運動／革命軍の決起と内部対立
アメリカ支配時代　187
僅か四カ月で決着した米西戦争／比米戦争の勃発と「友愛的同化」策／「ジョーンズ法」から独立に至る道のり／砂糖産業の繁栄が社会変革の契機となる／ラモスによる右派民族主義独立運動
日本統治時代　219
オスメニア、ケソン、ロハスの政治／日本軍のマニラ占領と共和国成立／「バターン死の行進」の真実／ロハスに始まる戦後のフィリピン政治／ラウレル、アキノの登場／独立戦争と対日協力者
おわりに　257
参考文献　260
文庫化にあたり　262

序章

歴史を語るにあたって

老華僑の壮絶な死が教えたこと

一九九五年十二月十一日、フィリピンの首都マニラの繁華街、ケソン・シティの路上でフィリピン華僑社会の立志伝中の人物、L・テイ氏が白昼堂々、乗用車に銃弾を撃ち込まれ殺された。この事件は日本でも各誌の一面を飾り、CNNニュースにも取り上げられた。

当然フィリピンでは話題騒然で、特に華人社会に与えた衝撃は大きく、彼等は彼の葬儀を総力をあげて一大イベントに仕立て、併せて抗議の大デモンストレーションにした。

このテイ氏のビジネス・パートナーが日本の食品会社・A社で、そのフィリピンにおける対等合弁会社・U社の日本側代表権者がS氏であった。

テイ氏はA社との合弁によりのし上がり、故マルコス大統領の裏組織マルコス・クローニーに食い込み、中華人商工会議所の会頭となり、ビジネス社会の大立者になった。

だが、S氏がフィリピンに赴任したのはマルコス政権崩壊後のことで、アンチ・マ

ルコスの中心人物、アキノ大統領の時代であり、その逆風を受けてテイ氏はその影響力を失い、またU社も長期低落傾向にあり、その立直しが急務となっていた。

彼がこの立直しに取り組んでみて驚いたことは、U社のかなりの部分がテイ氏系マフィアの収奪構造であったことだった。巨額の使途不明金があり、さらに会社自体が創業以来、脱税できていたことだった。最悪なのは、脱税方法が完全なる税吏の買収によるもので、税務署に提出する財務諸表に対応する帳簿すらなかった。フィリピンといえども、脱税するからには二重帳簿ぐらいは用意するものなのだ。

テイ氏のビジネス手法は「何でもあり」だった。従ってU社の立直しは「何でもあり」のビジネス流儀との対決であり、マフィアの利権構造との対決となった。それは結局、S氏とテイ氏との個人的対決となった。小切手の振出しはテイ氏とS氏のクロス・サインが必要であり、S氏が理不尽な支払いを拒否したからだった。

テイ氏は怒り、イヤガラセと脅迫は峻烈を極めた。そして最後の殺し文句が「ここはフィリピンだ。できない悪いことはない」だった。

この「何でもあり、できない悪いことはない」という行動原理が、結局はS氏のビジネス観・人生観に大きな影響を及ぼすことになった。テイ氏の壮烈な死が日本人の極楽トンボと思えるほどの安全信条を打ち砕いたからである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com